

1979年【昭和54年】9月3日(月曜日)

書 入

柴田 穂香

毛沢東の悲劇

Ⅰ文化大革命の発端
Ⅱ文化大革命の激動

建国三十年をこの秋に迎えようとしてゐる中国は、いま大きく振換しつつある。文化大革命はもはや完全に過去のものとなった。それどころか、非毛沢東化が進行するなかで、「プロレタリア文化大革命」そのものがいまや「愚の代名詞」となり、中国民衆も指導者も、文章という悪夢を必死に忘れ去ろうとしているかのようである。文化大革命の開闢期に集めた批判の對象となつた毛沢東批判の評論集『燕山夜話』や『三家村札記』も最近復刊され、紅衛兵に激しくつしあげられた劉少奇夫人・王光美女史も元氣な姿を見せて、ともに大衆の人気を博している。文化大革命は、まさに大いなる虚妄であつたのであり、中国社会を破壊に陥れたのであつた。

だが、中国自身が、こうして文化大革命を清算しようとしていればこそ、いまこそ、あの十年にもわたる狂乱怒濤のドラマが再構成され、記録されねばならない。

とはいえ、わが国の数多々の中国報道記者のなかで、このような歴史的過程を、自らの報道の眞実とその責任に照して記述し導く者がどれほど存在するであらうか。スクラップや縮刷版を編みこむたぐひに、わが国の文革期中中国報道の惨状を再確認せざるを得ないのである。

柴田穂香氏がこの点で貴重な例

外的存在であることは、いまや周知のところであらう。

本書は、著者が一九七七年初頭から現在にいたるまで、「サンケイ」紙上に綿々と連載しつづけている「毛沢東の悲劇」を第一期全五巻にまとめたものであり、第一巻は、文革前史ともいえる五〇年代半ば以降、文革の開闢を経て、六七年七月の武漢事件までを、第二巻は、武漢事件以降、六九年の九大全大会までを対象としている。

また、二巻のみの刊行なので、全体的な評価は将来にまた

記者魂發揮した執念的大作

文化大革命をドラマチックに再構成

中嶋 嶺雄

わねならないとはいえ、この部分は、著者が北京支局長として活躍し、また、それゆえに一九六七年九月に中国当局によって国外退去を言いわれたと云ふ原体験に基づいて、もっともドラマチックな文革初期の状況を見事に描きあげたものである。その手法は、できるだけ実証的に資料によつて経過をおとつづつ、まさに大河小説的にドラマを再構成しようとするものであり、おのずと読者をして眞迫感にひたらしめるあたり、著者がすべれたジャーナリストとしての構成力と文章力を有してゐることを示している。しか

も、たんに中国内政に注目しているのみならず、国際情勢の動きも克明に追つてゐるばかりか、一九五八年の「大躍進」政策の破綻者であつた劉少奇が六年春、みずから湖南の農村を視察し毛路線への批判に転じ、劉少奇時代を固めようとして、六四年暮の全国人民代表大会での幹部夫人の大奮進は、江青登場の「かくれミノ」だつたと、また、鄧小平「自己批判」の秘められた意、六八年三月の楊成武事件の真相など、新しい解釈が数多く加えら

つては、去る八月初旬、六万七千四百人が惨殺されたといふ驚くべき事実が最新新聞で確認されたが、本書ではいち早く当時の状況が分析されていて、著者の報道の正しさが浮き彫りされてゐる。

著者をして、ここまで執念的にこの大作に取り組ませた動機はなにか。それは凡百の中国報道や文革論の虚偽にたいする著者の怒りであり、文化大革命といふこの生々しい人間ドラマを眞流した情悪と怨恨の政治過程をこそ、ありのままに報すべきであるという記者魂であつたといわねばなるまい。(第一期全5巻、B6、I三〇五頁、II二五三頁、各二〇〇円・サンケイ新聞社) (なかにま・みねお氏) 東京外国語大学教授・現代中国学専攻)

★した・みのる氏はサンケイ新聞社論説・編集委員。東京外国語大卒。著書に「報道されなかつた北京」「周恩来の時代」「毛・周以後の中国」「柴田穂の中国診断」など。昭和5年生。

書

評

